

# 大学教育と図書館の好ましい関係

国際基督教大学（ICU）は、武蔵野の雑木林に囲まれた広大な敷地に、校舎や各施設が点在しています。正門から長い桜並木を越えた先に、2000年、ミルドレッド・トッパ・オスマー図書館が新設され、図書や雑誌と電子情報を統合してより一層学習にふさわしい環境が提供されています。スタディエリアの120席にはインターネットに接続されたパソコンが置かれ、ほかに日本初の自動化書庫、マルチメディアルーム、グループ学習室があります。

その奥には1960年完成の図書館が、開架方式にて運営されています。65万冊を超える蔵書は、和書、洋書とも広範な分野におよんでいます。1953年に大学としてスタートした学生数3,000名弱のリベラルアーツ教育を実践するなかで、図書館が果たしてきた役割を、図書館実務の積み重ねて答えてきた姿をお伝えしたく現場からのレポートをお願いしました。

## ICU図書館の挑戦

国際基督教大学 島山 珠美



**図書館はなぜ利用が高いのか**  
最近、他大学からの見学や問い合わせが増えてきている。そこで寄せられる質問の多くは、「国際基督教大学（ICU）の図書館はなぜ利用が高いのか?」というものである。

ICU図書館の一日の入館者数は1,300名を数え、学生の約半数が図書館を利用していることになる。また、ICUの学生一人あたりの年間貸出冊数

は約60冊、これは国内の大学平均の7倍に相当する。貸出冊数の多さが高く評価され、朝日新聞社が発行している「大学ランキング」の大学図書館部門においてICUは毎年上位にランクされている。昨年は、図書館員が共同で執筆した「図書館の再出発〜ICU図書館の15年」(大学教育出版)を出版した。この本には、今までのICU図書館の取り組みについて詳しく述べている。



このように、ICU図書館の特色あるサービスや利用状況が様々な場面で公表紹介されるようになり、外部から注目を浴びるようになった。そこで、改めてICU図書館の利用の高さの理由を考えてみることにした。そしてたどり着いた答えが、利用者と図書館(員)の距離が近いことなのではないかということである。利用者と図書館が一对一の関係でサービスを提供するの、どの図書館にも共通している。しかし、大学図書館における利用者と図書館の関係はこれだけではない。大学図書館の利用者には、学生と教員が存在する。大学図書館は、教員と図書館と学生という3者の相互関係を築き上げることが重要である。

ICUが推し進めるリベラルアーツ教育は、教員と学生とが密接に関わり合って成立する。ICU図書館はリベラル

アーツ教育の基盤として、常に教員と学生の間立って、教員と学生の距離を縮める努力を重ねてきた。ここでは、ICU図書館が教員・学生との関係を深めるきっかけになっている情報リテラシー教育を取り上げ、教員と図書館の連携体制と教育内容を紹介するとともに、図書館が大学の教育活動に携わる意義と成果についてまとめてみた。

### 図書館利用と情報リテラシー教育の関係

ICU図書館の貸出が多い理由の一つとして挙げられるのが、「貸出冊数無制限」というサービス体制である。しかし、貸出冊数が無制限であっても、学生が多量の本を必要としなければ貸出は増えない。それでは、なぜICU生は本を求めたのだろうか。「ICU生は読書好きなのでは?」ということを思われる方もいるかもしれないが、その答えは「NO」である。ICU図書館のコレクションの大半は学術書であり、単に読書目的で借りていくとは考えにくい。

ICU図書館の利用の高さの最大の要因は、情報リテラシー教育であると言っても過言ではない。ICU生の大半を占める4月入学生の情報リテラシー教育は、1〜2年次の必修科目である「英語教育プログラム」(English Language Program, ELP)を通して行われる。ELPは英語を教えるのではなく、英語は使用する言語ツールであり、大学生に必要な「読む」「書く」「話す」「聞く」という能力を習得させることを目的とし



ている。つまり、ICUにおいてELPは、導入教育という位置づけである。学生は2年間のELPの授業の中で、徹底的に学術論文の書き方を鍛えられる。ELPで培った知識が基礎となり、学生は他の授業で出されるレポートやエッセイの課題にも常に学術性を重んじ、必ず参考文献として図書館の資料を使用する。すなわち、情報リテラシー教育と図書館利用は密接な関係にある。情報リテラシー教育がどれだけ学生に浸透しているかが、その大学の図書館利用の鍵を握っているのである。

### 教員と図書館員の連携

ELPにおいて、図書館員は情報探索法指導を、情報の整理法と表現法の一部をELPの教員が指導する。図書館員が担当する授業は、1年生に対して2コ

マ、2年生には1コマ、合計3コマである。3回の授業の具体的な内容は、次とおりである。

#### 第一回（1年次春学期）

図書館資料の基礎知識とOPACの使い方

#### 第二回（1年次秋学期）

オンラインデータベースを使った雑誌論文の探し方

#### 第三回（2年次）

情報収集の戦略の立て方と主題に合った文献の探し方

1学年の人数は、560〜580名ほどである。この600名近い学生を40名前後のクラスに分けて、1クラスずつ授業を行う。1クラスを担当する図書館員は2名。一人は主担当者として司会進行を行い、もう一人は実習の補佐を担当する。

このELPの授業の他にも、9月入学生必修科目である日本語教育プログラム（Japanese Language Program, JLP）や卒論ゼミにおいても図書館員による情報検索に関する指導を行っている。図書館員が担当している授業を合計すると、年間60回にも上る。このように、情報リテラシー教育は、現在では図書館の主要業務の一つであり、13名の図書館員全員で取り組んでいる。

最後に、情報リテラシー教育に図書館が関わることの意義について述べてみたい。学生は図書館員による授業を受けることで、図書館員が指導者の一員であることを認識する。そして、図書館は資料を提供するだけでなく、学習をサポート



### 次のステップとして

情報リテラシー教育によって、確かにICU生のアカデミックスキルは向上している。しかし、情報の多様化・膨大化が進んでいる現在、今の情報リテラシー教育だけでは充分とは言えない。そこで、ICUでは、全学を挙げて学生のサポート体制の強化に乗り出すことになった。まだ構想段階ではあるが、その骨子は学習支援の総合窓口として「ライティング・センター」（仮称）を設置することである。「ライティング・センター」は、教員や関係部署が協同で運営する。そして現在、「ライティング・センター」の設置場所として、図書館が候補に挙がっている。

図書館の中に「ライティング・センター」が実現すれば、今まで以上に図書館が学生の拠点になることは間違いない。そして、図書館は場所を提供するだけではなく、学生の学習サポート業務の根幹を担うことになるだろう。そうすると、組織の見直しや図書館員のスキルアップなど、確かに課題や困難が待ち受けている。しかし、大学の教育活動に積極的に関わっていくことこそ、これからの図書館の重要な使命であると考えられる。

われわれ図書館員は、つつい図書館の内側に焦点を合わせがちである。しかし、大学図書館は、その上にある大学のビジョンを常に意識しなければならぬ。大学という組織の中で、図書館は今「何ができるか」「何をすべきか」を考えていけば、自ずとこれからの図書館の方向性が見えてくる。図書館という枠組みに捉われず、新たなことに果敢にチャレンジする精神をこれからも持ち続けたいと思っている。

（図書館長代行）